



# 文化・経済フォーラム滋賀

## 提 言

令和3年（2021年）2月13日

# アートを地域のプラットフォームに —文化と経済の連携を深める新しい視点の探究—

## ■ はじめに

新型コロナウイルス感染症の脅威によって日常が変化しはじめた。そして2020年、世界的パンデミックにより歴史や生活様式は変わり、マスクが手放せない状況となった。行動が制限され、見えない敵と戦う恐怖はとても辛い。人類の非力さを痛感するこの現状を果たして誰が予測できただろうか。このような中、びわ湖ホールでは昨年3月にオペラ「神々の黄昏」を無観客で上演し、YouTubeで無料配信することで、世界30カ国41万人が視聴した。この活動が評価され、びわ湖ホールは「第68回菊池寛賞」を受賞。今年6月27日には、長期休館していた滋賀県立近代美術館がリニューアルオープンする。コロナ禍において、感染症対策を施しながら芸術活動を継続する姿勢を励みに、これから文化と経済の連携をどのように深め、未来を創るのか、文化・経済フォーラム滋賀の2019年～2020年の活動を総括しつつ、以下の提言を行う。

## ■ アートについて

未来を創るには、見えないものにカタチを見出すことが必要だと考える。

2019年2月17日の文化・経済フォーラム滋賀総会において発表された提言『地域とアートをつなぎ、新たな文化を育む』では、アートの理解を「美術分野に限らず、建築、音楽を含めた創作、表現活動」と捉えた。

今回コロナ禍に直面し、アートは特別なものではなく、水や空気と同じように、日常になくてはならない生きるために必要なものだと多くの人が気付いたのではないか。アートは芸術性だけではなく、生きるための教育性を含む「人間力、文化力」を育むものであり、あらゆる領域との連携を促す媒介役として、また、新しいビジネス展開を生み出すツールやメディアとして、その理解をさらに深められたらと考える。

## ■ 見えないものにカタチを見出す絵本「ちいきとアートのものがたり」

「感覚的な環境や物事等を明確化する〈言葉〉の力を表出させるのではなく、〈言葉〉から得た感覚的思考をもってイメージを創り、曖昧力を可視化するとどのようなカタチになるのだろうか。」

このような視点から、実験的ではあるが、これからの時代を牽引する地域の子どもたちと絵本づくりを行った。絵本と言っても、子どもの本という固定観念をとりはずした絵本である。

前述の提言『地域とアートをつなぎ、新たな文化を育む』の最後に書かれた「地域とアートがつながった光景をイメージする」物語を、滋賀県内の小中学校に在籍する子どもたちに読み聞かせた。物語の内容が理解できてもできなくても、その場の空気、言葉の音等、体感から得た純粋な子どもの理解をもってその場で描きあげ、協働作業から「ち

いきとアートのものがたり」をつくりあげたのである。この絵本をつくる活動も、文化と経済が地域と人を巻き込み連携した〈文化・経済〉のカタチである。



制作中の子どもたち



完成した絵本

### ■ 「文化で滋賀を元気に！」するプロジェクトの実施

文化・経済フォーラム滋賀では、「文化で滋賀を元気に！」するプロジェクトに取り組んでいる。

滋賀県内には多くのアーティストが居住し、制作活動の場としているが、昨年8月29日に大津市山中町の共同アトリエ〈山中 suplex〉において開催した『文化ビジネス塾』では、美術ライター小吹隆文氏と若手アーティストたちが対談し、県内外から滋賀へ向けられるアーティストの視点と関わり方等、アートの現状を表現者の生の声として聞くことができた。そして、アーティストの多くが県外に発表の場を求めている現状が浮き彫りとなった。

アートと地域を繋げ、新たな文化や地域産業を育む形を模索しながら、次世代を担う県内の若手アーティストを紹介するイベントが、2021年2月13日にびわ湖ホールで開催する『びわ湖・アーティスト・みんぐる』である。空間や時間が離れていても繋がることのできる芸術や文化が、地域のプラットフォームとして重要な役割を担っていくべきではないかという考えのもと、アーティスト等の活動範囲を広げる機会をつくり、人々が芸術や文化を通して繋がることで、地域の力を深めることを目的としている。産官学民の各分野が参加する文化・経済フォーラム滋賀の強みを活かして、アートにふれる機会の少ない方を含め、様々な分野の人々と出会い意見交換することで、アーティストの今後の活動の開拓につなげる環境づくりと、社会的につながる芸術や文化が、これからの地域社会で重要な役割を果たすものであると感じていただく機会でもある。

文化・経済フォーラム滋賀では、「文化で滋賀を元気に！」するプロジェクトとして、『文化ビジネス塾』のほか、『文化経済サロン』『文化で滋賀を元気に！シンポジウム』等の活動を行っているが、文化・経済への関わりに向けた明確な答えを短期で導き出すことは難しい。しかし、その場で答えが見つからなくとも、これらの活動から滋賀の文化と経済の関係性や共通認識を見出し、連携するための道筋を考える場がなければ多種多様な学びと知へはつながらない。トップランナーからの刺激は、滋賀の文化・経済を大きな冒険へと導き、関係性の美学へと誘うこととなる。活動の詳細については、「News Letter 第8号」（2020年12月発行）に記載されている。

## ■ 提言『アートを地域のプラットフォームに』

コロナ禍において先行きが見出せぬまま、文化芸術活動、経済活動などが自粛に追い込まれた。これまでの活動が機能しにくい負のスパイラルに多くの人が巻き込まれ、足踏みを余儀なくされている。今後の活動が不透明となり出口を見出せないこの状況においては、目の前の「今」を意識せざるを得ないが、この環境は、これまで築き見出してきた形を再構築できるチャンスだと考える。

感受性を育む芸術教育から得る「人間力、文化力」は、接着剤のようなものである。芸術教育は、教育課程において特化するようなものではないが、芸術（アート）体験を通して目を見たこと、考えたこと、心を込めてつくり上げる日常と非日常、素材と人、時間と空間等をつなぎ合わせる創造力を養う。良い素養のあるものが財産を築くように、この接着剤の使い方によっては、想像を超えたものを導き出すこともある。

2019年の提言よりアートが築く財産を再認識し、地域社会で活用する議論を進めてきた。人々が地域社会の課題に向き合うとき、文化と経済の本質を理解し、それぞれのバランスを取りながら行動することが重要ではないか。

昨年10月18日に滋賀県立文化産業交流会館で開催した『文化で滋賀を元気に！シンポジウム』では、近江商人の経営理念「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」を起点に、現在の「新・三方よし」を見出そうとした。長期的な展望で社会全体の幸せを願う「三方よし」の姿勢は、これからも滋賀の文化と経済の関係を支える力となる。

2019年9月4日に滋賀県立文化産業交流会館で開催した『文化経済サロン』で講演いただいた山口周氏は「経営における意思決定のクオリティは、アート、サイエンス、クラフトの三つの要素のバランスによって大きく変わる」と述べた。滋賀の文化と経済を今後さらに連携させるには「サイエンス（理論）」と「クラフト（技術）」だけでなく、同じステージに「アート（感覚）」が加わったプラットフォーム（物事を動かすための土台となる環境）が機能し、教育、医療福祉、郷土歴史、自然環境、観光産業など様々な分野とつなげる滋賀の新しい姿を構築すること。これにより、古き良き文化を織り交ぜた新しい価値観を生み出すことを期待したい。

前述の『文化で滋賀を元気に！シンポジウム』で講演いただいたNPO法人グリーンバレーの大南信也氏が述べたように、いつでも問題はやはり人が解決していくものであるから、「人間力、文化力」を育てるアートが地域のプラットフォームとして力を発揮できるよう、文化と経済が連携する環境づくりを進めていきたい。

これを発足10周年の節目の提言とさせていただく。

## ■これまでの提言と基調講演

2011年（平成23年）

基調講演：「アートと社会」 鷲田清一氏（大阪大学総長）

2012年（平成24年）

提言『文化ビジネスの開発で滋賀の文化と経済に新展開を』

基調講演：「文化の力が未来を拓く」 大原謙一郎氏（公益財団法人大原美術館理事長）

2013年（平成25年）

提言『文化・芸術・ビジネスの見本市としての国民文化祭へ』

基調講演：「Museum Change a City ～文化が人をつくり、街を変える～」

蓑豊氏（兵庫県立美術館館長、金沢21世紀美術館特任館長、大阪市立美術館名誉館長）

2014年（平成26年）

提言：『滋賀の文化を発信する国民文化祭を早期に、スポーツイベントと連携した開催へ』

基調講演：「文化のチ・カ・ラ」 田村孝子氏（グランシップ（静岡県コンベンションアーツセンター）館長）

2015年（平成27年）

提言『自然・歴史・暮らしが統合された地「近江」の発信を ～近江遺産“近江八百八景”から 日本遺産そして世界遺産へ～』

基調講演：「ふるさと・滋賀に思うこと」 姫野カオルコ氏（第150回直木賞・平成26年度滋賀県文化賞受賞）

2016年（平成28年）

提言『新生美術館計画の実現と滋賀の魅力の発見・発信へ』

基調講演：「アートとコミュニケーションーその由来と未来ー」 山極壽一氏（京都大学総長）

2017年（平成29年）

提言『世界遺産、無形文化遺産、世界農業遺産の登録等への取組みを ～地域の文化遺産を見直し、グローバルな評価へ～』

基調講演：「文化はムダでない」 津田和明氏（サントリー(株)元副社長、(独)日本芸術文化振興会前理事長）

2018年（平成30年）

提言『地域文化を育む、新たな観光を創造する』

基調講演：「多様な企業文化が作る地域社会」

小林徹氏（オプテックスグループ（株）代表取締役会長兼CEO、学校法人京都成安学園理事長）

2019年（平成31年）

提言『地域とアートをつなぎ、新たな文化を育む』

基調講演：「アーティストと地域をつなぐー瀬戸内国際芸術祭を事例にー」

北川フラム氏（アートディレクター）

2020年（令和2年）

提言『文化で滋賀を元気に！多様な人材を育む地域活動の推進 ～アートを媒介として地域の人々を繋ぐ地域コーディネーターの育成と活躍の場の創造～』

基調講演：「ふるさと、どんどん、ちかくなるー大好きな だいすきな 近江ー」

澤田康彦氏（前「暮らしの手帖」編集長、エッセイスト）

以上

先ずは、新型コロナウイルス感染症の脅威を打ち砕き、希望に満ち溢れた、マスクが外せる平和な日常を取り戻せるよう、文化・経済の素である『心』のバランスを保ちながら、皆様と一緒に前進していきましょう。